石神遺跡第３次発掘調査現地説明会資料

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1983年10月15日

Ⅰ　はじめに

当調査部では昭和56年度から継続して石神遺跡の調査を進めており、第３次に当たる本年度は 7月18日から着手した。発掘面積は約1500㎡である。調査は未だ半ばを過ぎたばかりで、今後の進展に委ねるべき点も少なくないが、中間発表として現在までに知りえた調査の概要を報告しておきたい。

石神遺跡は明日香村字石神に所在する。明治35年秋、本年度調査区の東に接する水田から、飛鳥資料館に展示されている「須弥山石」「石人像」が出土したことで、石神の地は早くから著名であった。昭和11年春には石田茂作氏らによって部分的な発掘調査が行なわれた。この時の調査では、石造物出土地点付近で屈折する石組溝と石敷遺構の存在が確認され、これらは石造物と一連の施設で、斉明紀の記事にみえる饗宴の場との関連が推定されたのである。しかし、この段階では重層する遺構を層位的に峻別して発掘する方法はまだ未熟であり、また、各遺構の年代比定にも疑問があって、石神遺跡のこうした性格づけは単なる想定の域を出なかった。また、明治45年の喜田貞吉氏の提言以来、飛鳥寺の北で雷丘の東方にひろがる水田地帯は天武天皇の飛鳥浄御原宮跡の所在地と推定されており、当遺跡は７世紀の飛鳥を考える上で極めて重要な位置を占めているのである。

Ⅱ　これまでの調査

第１・２次調査の結果、７世紀代の遺構は二時期あることが明らかになった。７世紀中葉の遺構としては既述の石組溝のほかに、その東方で、掘立柱建物等が発見されている。７世紀後半には石組溝を埋めたて、付近一帯に盛土したあと、新たに大規模な掘立柱建物が造営されたことが明確になっている。７世紀中葉までの遺構を変更した後半の事業規模の大きさには目をみはるものがある。また、建物周囲は河原石を敷きつめて舗装しており、両時期ともに飛鳥の宮殿遺跡に特徴的な工法がとられていることが注目される。

Ⅲ　第３次調査の概要

遺構は大きく分けて７世紀中葉と後半の二時期に造営されており、第１・２次調査の成果と符合している。

７世紀中葉の遺構には石組溝Ａ・Ｂ、石敷Ａ・Ｂ・Ｃ、バラス敷Ａがある。７世紀後半の遺構には東西に伸びる掘立柱列とその基壇、方形石組遺構、掘立柱建物・溝等がある。なお、調査区南辺では第１次調査区から続いて西流する自然流路によって広範囲にわたって遺構が破壊されている。

１．７世紀中葉の遺構

〔石組溝Ａ〕　石組溝Ａは第１次調査区西端で検出した南北石組溝ＳＤ１３０の北端から西に折れる東西石組溝の延長部で、西へ約 7mのびたあと再び北折しそのまま北へ一直線にのびている。幅 0.8m、深さ 0.7mで底には河原石を丁寧に敷きつめている。溝の北半部では後世にその側石の多くが抜き取られており、底石のみが遺存する。底石は一部では二重に敷かれているが、上層の底石面は下層に比べてやや不揃いである。上・下層ともに底石上には砂層の堆積が認められ、かなりの流水のあったことが知られる。上層の石敷は下層の砂層の上に設けられており、溝の改修時の仕事である。この石組溝は今次調査区の北方へ水を引くための施設であろう。

〔石組溝Ｂ〕　石組溝Ｂは第１次調査区の西南端でＳＤ１３０に取り付く幅0.45m、深さ0.45mとやや小振りの東西溝の西延長部にあたり、取付部では、底石面がＳＤ１３０の底より約25cm高いことが判明している。今回の調査区内では底石のみが残る状況となっているうえに、調査区の中程以西については自然流路で壊されていて、その行先は詳らかでない。この溝は石組溝ＳＤ１３０から西へ水を引くためのもので、西方に水を使う何らかの施設の存在が想定されるが、その解明は今後の課題である。なお、石組溝Ｂの南には石敷Ｃがある。石敷Ｃは20～30cm大の河原石を敷きつめたもので、石組溝Ｂに接して南方に広がるものと思われる。北方への広がりについては後世の自然流路による破壊が著しいために詳らかでないが、後述する石敷Ａ・Ｂへ連なる可能性がある。

〔石敷Ａ・Ｂ〕　調査区西辺では石敷Ａ・Ｂを検出した。両者は一連のものであるが、中程を７世紀後半に破壊されており、便宜上、Ａ・Ｂに分けて述べる。

石敷Ａは調査区の西北部に広がり、東南に高く、西北方に緩く傾斜している。広範囲にわたると共に、やや大型の石を用いており、飛鳥の石敷として一級の内容をそなえている。石敷Ａの東辺は東に縁を揃えて見切っており、その東方にはバラス敷Ａが続く。このバラス敷は黄色砂質土で整地した上に薄く敷いたもので、上面は石敷面に揃えている。石敷Ａとは手法を異にするが、石敷と同様に舗装のためのものであろう。現在までのところ、石敷Ａやバラス敷Ａに伴う建物等の施設は確認しておらず、石敷Ａやバラス敷Ａは広大な広場の一部をなすものと思われる

石敷Ｂは調査区の南半部で検出した。７世紀後半の遺構が重複しているために、石敷はその一部を検出したにとどまっている。この石敷は西南側が高く、北と東とへかなり急に傾斜する特異な構造のものである。この傾斜面の幅は 2m弱で、その上・下の比高差は現状で約20cmを測る。本来はさらに高低差が著しかったものと思われる。傾斜面に続く石敷はなだらかな傾斜で北・東に広がり、一部ではバラス敷に続くことを確認している。

２．７世紀後半の遺構

７世紀後半には中葉期の土地利用を大きく改変し、新たに大規模な造営が行われている。まず、調査地の西半部を中心に厚さ20cmほどに黄色土を盛土して整地が行われる。石敷Ａ・Ｂ、バラス敷Ａはこの黄色整地層によって覆われて地下に埋もれる。遺構としては掘立柱列と、これに伴う基壇、掘立柱建物、石組遺構等がある。

〔掘立柱列Ａ基壇〕　調査区の中程で検出した東西に伸びる掘立柱列と、これに伴う基壇である。柱列は東西15間分を確認している。柱間寸法は約2,55mである。東は第１次調査で検出した掘立柱の塀に連続するものとおもわれる。これまでに東西約78m分を確認したわけである。基壇は黄色土と黒褐色土を互層に積土したもので、幅は約 3mである。発掘区の西端には基壇南縁の化粧石が一部残っている。また、一部では化粧石の抜き取り穴を検出している。細部については、今後の調査で明確にしていきたい。

〔石組遺構〕　石敷Ｂの東には大きな河原石を用いた石組遺構がある。平面形はほぼ方形で、内法で東西 3,0m、南北 3,2mを測る。深さは 0,6mほどである。底にはやや雑ではあるが玉石を敷いている。掘形は石敷Ｂを壊して穿たれている。その性格については今のところ詳らかでない。

〔掘立柱建物Ａ〕　石組遺構の東に接して掘立柱建物Ａがある。東西５間（約 9,5m）、南北１間（ 4,2m）の東西棟である。柱穴は自然流路で削られており、一部の柱穴はその痕跡を失っている。発掘区の東端にも掘立柱建物があるが、まだ全貌は明かになっていない。

そのほか、７世紀後半の遺構としては東西素掘り溝Ａがある。幅１m、深さ 0,4mで、発掘区の東端から西端まで、まっすぐにのびている。この溝は重複関係から、掘立柱列Ａとその基壇よりも古いことが判明している。

（その他の遺構）　以上のほか、７世紀後半から末にかけての時期の遺構には素掘り溝・柱穴・土壙等多数があり、天武朝以降もなお当地では活発な土地利用が行われていたことが窺える。

Ⅳ　遺　物

今回の調査で出土した主な遺物としては土師器、須恵器、軒瓦、丸・平瓦、硯、鉄鏃、鉄釘、銅製品、管玉、ガラス小玉、砥石、紡錘車がある。土師器は７世紀中葉以降、７世紀末ないし８世紀初頭にかけての時期のものが多量に出土している。ことに７世紀後半期の土器の出土量は膨大である。軒瓦では飛鳥寺式の単弁蓮華文軒丸瓦や奥山久米寺出土のものに類似した単弁蓮華文軒丸瓦が少量出土している。ほかに、川原寺式の複弁蓮華文軒丸瓦や重弧文軒平瓦がある。

Ⅴ　ま　と　め

個々の遺構の年代や性格については調査途中でもあり、なお不分明な点が少なくないが、これまでの調査成果と今後に残された課題について簡単にまとめておきたい。

７世紀中葉の遺構としては石組溝のほかに、広範囲にわたる石敷の存在が明確になった。この石敷は第１・２次調査で検出した建物四周の石敷とはやや性格を異にするもので、バラス敷と共に広大な広場を形成していたものと考えられる。これが、『日本書紀』の斉明紀を中心にたびたび登場する「飛鳥寺西の槻樹」の広場、あるいは「飛鳥寺西」の広場の一部に相当することはほぼ間違いない。この広場は斉明朝には北方や南方の人々を饗応する舞台となり、その際には須弥山石などが築かれ

た場でもあった。今回の発掘地はこの広場の中の北部に位置するものとみられる。

しかし、これまでのところ、「須弥山石」や「石人像」が据え置かれた本来の場所は明らかになっていない。また、これら石造物との関連で近くに所在の推定される「石上池」についても、これから調査・研究を深めていかねばならない。西南に接する水落遺跡（斉明朝の水時計の跡）との関連を含めて、今後に残された課題は少なくない。

7世紀後半には第1次・2次調査区、さらに水落遺跡を含めた広範囲に、中葉の土地利用を大きく改造する大規模な造営工事が行われたことが明確になった。ことに、掘立柱列Aは飛鳥寺の北面大垣の北約 9mの位置を東西方向に一直線にのびており、北方に広がる重要施設の南を限る塀状の施設にあたるものと考えられる。天武天皇の飛鳥浄御原宮跡との関連でとくに注目される施設といえよう。

推古二十年（六一二）是歳

是歳、百濟國より化來る者有り。（中略）是に、其の辭を聽きて奏てず。仍りて須彌山の形及び呉橋を南庭に構けと令す。時の人、其の人を號けて、路子工と曰ふ。亦の名は芝耆摩呂。

斉明三年（六五七）七月十五日

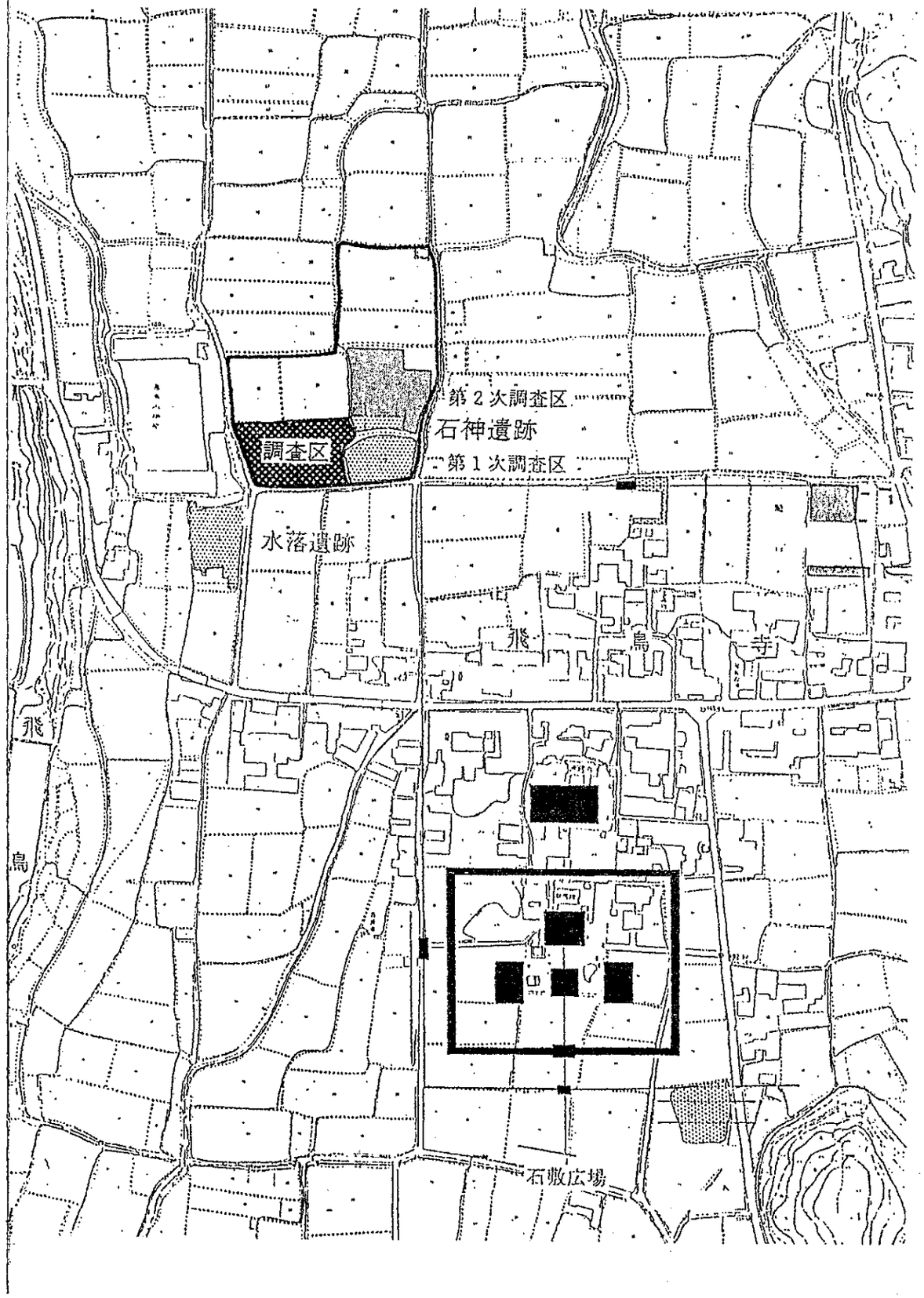
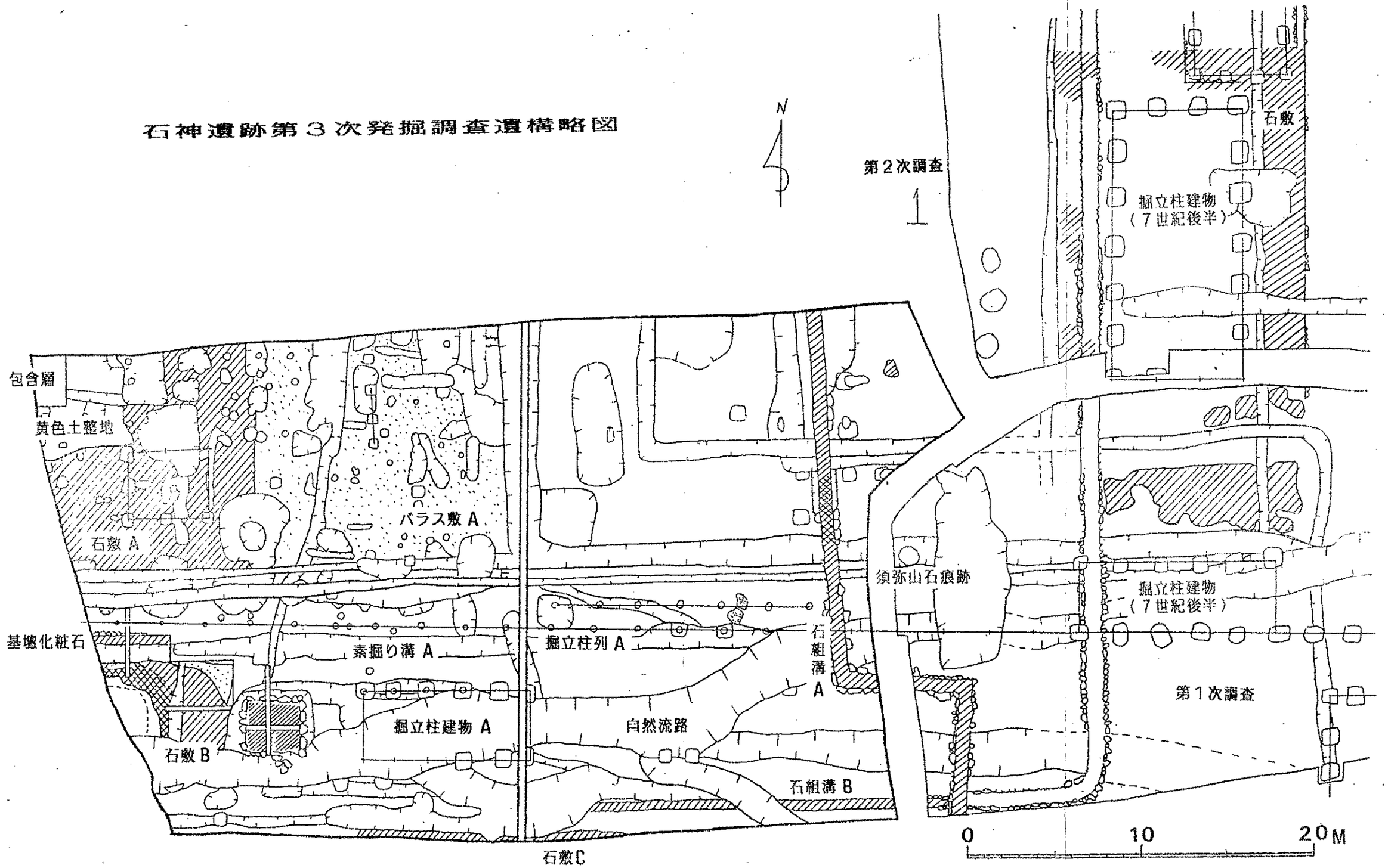
須彌山の像を飛鳥寺の西に作る。且、盂蘭盆會設く。暮に覩貨邏人に饗たまふ。

斉明五年（六五九）三月十七日

甘橿丘の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。

斉明六年（六六〇）五月

又、皇太子、初めて漏剋を造る。民をして時を知らしむ。又、阿倍引田臣、名を闕せり。夷五十餘獻る。又、石上池の邊に、須彌山を作る。高さ廟塔の如し。以て齶田四十七人に饗たまふ。



石神遺跡第３次発掘調査遺構略図